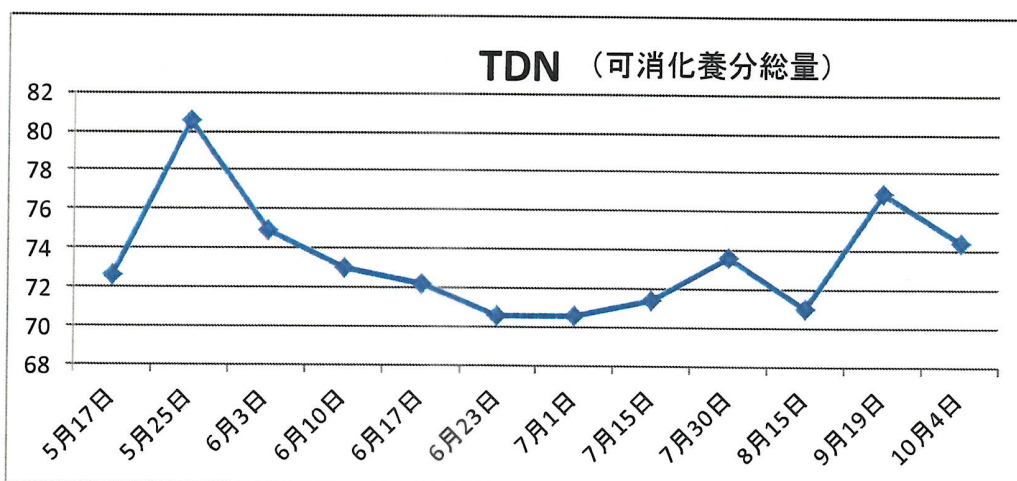
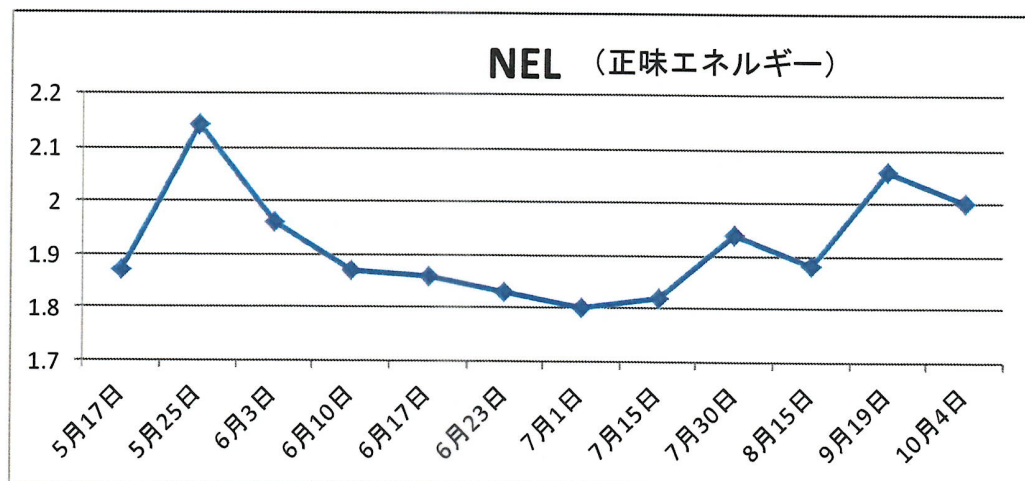


同じ草が採食と再生を繰り返しているにもかかわらず、春先のスプリングフラッシュ、夏の2番草、秋の3番草へと放牧草の栄養価は常に変化しています。この変化を見きわめ、牛舎で与える飼料を上手に使いこなすことが放牧管理のポイントになります。

5月～10月までの期間、ある放牧地でおこなった放牧草の栄養価の調査を以下に示します。

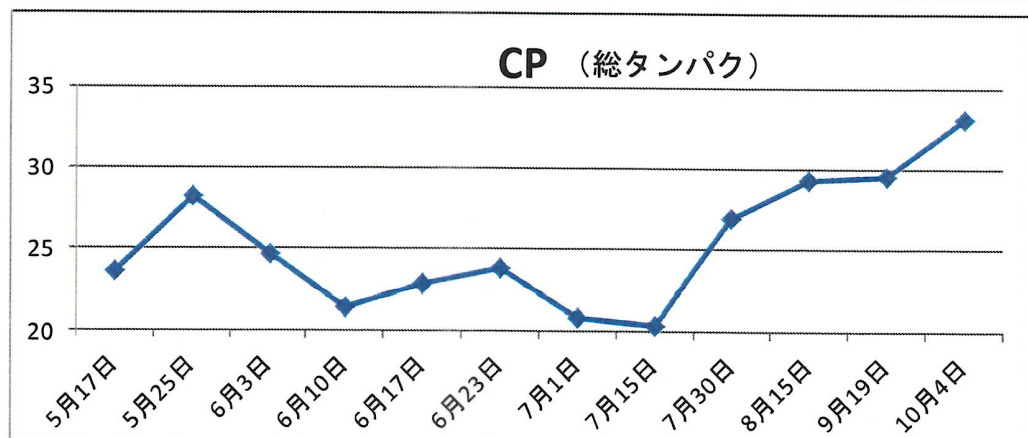


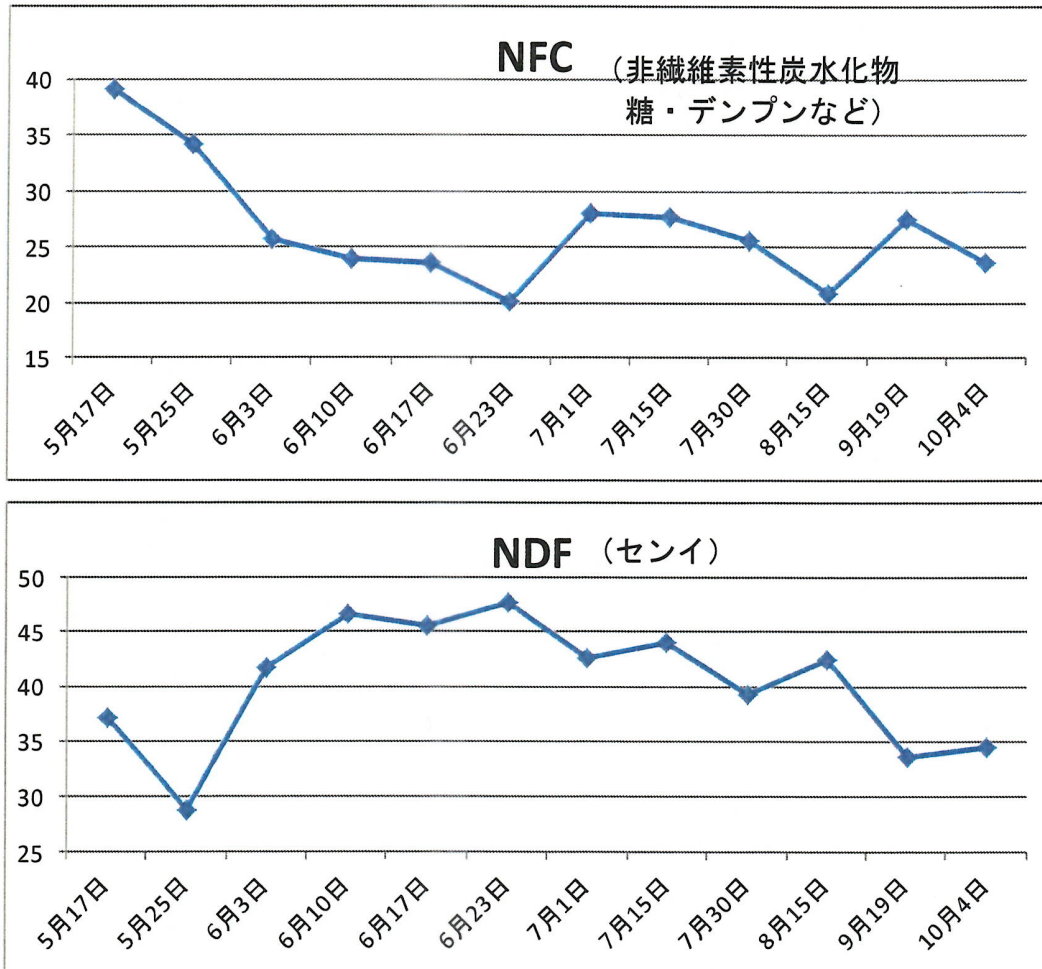
TDN・NEL・CP・NFCともにスプリングフラッシュの5月下旬にピークを迎え、その一か月後の6月下旬～7月上旬には最低レベルに低下します。その後は秋の3番草でふたたび高い数値になります。



春に旺盛な生命活動を開始する放牧草の栄養価は、高泌乳牛用TMRに匹敵する栄養価を持っています。このタイミングはほぼ放牧草のみで高泌乳が可能です。ただしこの期間は長く続きません。6月中～下旬からは何らかのエネルギー給与が必要となってくるでしょう(トウモロコシやビートパルプ)。

CPも下がってきますが、そもそもが高レベルなのでタンパク質の給与は必要ない場合が多いですが、放牧地の条件によっては必要です。





その後夏場は全ての栄養価で低レベルになり、乳量も徐々に落ち始めます。放牧草の量も少なくなってくるので牧区を広げたりして採食量を落とさない工夫が必要です。

放牧草のセニイ分も低下し始めますが、放牧草が十分あれば、まだ粗飼料の給与はそんなに必要ないと思います。乳量を維持したい場合、引き続きエネルギーの補助的給与は必要でしょう。トウモロコシや麦の1回給与量には上限があります。

その後秋になると放牧草の栄養価は越冬を前にしてなのか再び栄養分を蓄えはじめます。ただし放牧草の量も再生力も低下しているので、牛舎内で粗飼料と配合飼料の給与が必要となってくるでしょう。この際もしMUNが上昇してくるようなら配合飼料はCPの低いもの（16以下）を選ぶか、ビートパルプやトウモロコシなどのエネルギー飼料との混給が必要でしょう。

ここに書いたのはあくまでも一つの例で、実際はその農場の牧区ごとに対応が必要になってきます。

別海地区で放牧酪農で成功されてるAさんは「牧区ごとの放牧草の栄養価や再生量・採食量などを観察しながら、そのつど次の牧区のことを考え、牛舎内で何を補給するべきかを考えることが放牧管理のポイントだ」と言っています。

1年を通して安定した管理を基本とする周年舎飼いTMR給与管理と大きく異なる点は、飼料となる放牧草の状況変化を敏感に察して、その都度臨機応変に対応する能力が絶対的に必要となってくるという点でしょうか。

しかし、牛を見てその変化を感じ取り、臨機応変に対応するという点は実は全ての牛飼いに共通することだと思います。単に方法論の違いなのかもしれません。

放牧酪農の成功戦略には、放牧草の変化に対応した季節分娩も必要となってきます。スプリングフラッシュの草を分娩後間もない牛に食べさせる。これがどれだけのインパクトを農家経営にもたらすことかを再考する必要があるでしょう。現在、数件の放牧酪農家さんで季節繁殖への転換を取組んでいるところです。